

## 研究機関名：東北大学

受付番号：	2011-601
研究課題名	自己免疫性膵炎の病理組織学的検討
研究期間	西暦 2012年03月（倫理委員会承認後）～ 2017年03月
対象材料	<input type="checkbox"/> 病理材料（対象臓器名） <input checked="" type="checkbox"/> 生検材料（対象臓器名 膵臓） <input type="checkbox"/> 血液材料 <input type="checkbox"/> 遊離細胞 <input type="checkbox"/> その他（）
上記材料の採取期間	西暦 2008年01月～2012年02月
意義、目的	<p>自己免疫性膵炎（autoimmune pancreatitis:AIP）は、その発症に自己免疫機序の関与が疑われる膵疾患である。AIPは高齢男性に好発し、膵腫大や閉塞性黄疸を伴い、膵癌に類似した臨床像を呈する。治療はステロイドの投与が一般的で、膵腫大や黄疸はステロイド投与により改善する良性疾患で、その予後は極めて良好である。また本疾患はIgG4関連硬化性疾患として膵臓以外にも胆管、唾液腺、後腹膜、腎臓、甲状腺、肺など全身疾患である可能性が示唆されており、自己免疫学的機序の関与が示唆されるがその発症機序・病態についてはほとんど解明されていない。自己免疫性膵炎はステロイドが著効するにも関わらず、膵癌もしくは胆管癌と鑑別を要する症例が存在し、外科的治療を選択されることが未だにある。その、組織学的特徴は、リンパ球形質細胞浸潤、IgG4陽性形質細胞浸潤、閉塞性静脈炎、storiform fibrosisという特徴的な線維化を認めるが、切除例以外での膵組織採取が難しいことから、AIPの病理組織学的に解明されていない点が多い。</p> <p>近年超音波内視鏡下穿刺吸引生検（EUS-FNA）が普及し、膵臓から組織を採取することが可能となり、生検材料からのAIP診断の試みが普及し始めている。</p> <p>本研究の目的は、EUS-FNA下に採取した膵臓の生検材料を元に病理組織学的検討を行い、AIPの病因・病態を解明することである。</p>
方法	EUS-FNA下に採取された膵臓の組織から病理組織学的に検討する。
問い合わせ・苦情等の窓口	東北大学消化器内科 菅野 敦 022-717-7171